124　モノクローナル抗体を用いたPRL－IRMAによる血中及び組織中PRL

大浪俊平（産業医科大学放射線部），塩崎　宏，中田　豊（同放射線科），江藤澄哉（同第一内科）

下垂体腺腫組織および患者血清中のPRLには size heterogeneity の存在することを報告してきたが，今回モノクローナル抗体によるPRLのIRMA法を用いてPRLoma の molecular form について分析し，従来のRIAによるそれと比較検討した。手術時に得られたPRLoma 抽出物と患者血清をSephacryl S-300 カラムでゲル濾過し，各分画をそれぞれPRLのIRMAおよびRIAにより測定した。PRLのIRMAとRIAによる分画パターンには著明な差異を認めなかったが，前者の方が大分子領域の割合がやや低い傾向を示した。現在，上記症例の大分子分画の抗原性につき，SDS－PAGE，autoradiography を用いて検討中である。

125　健常人における，血中PRL, FSH, LHの日内及び経日的変動の検討

小林久江，新井洋子，五十嵐均（群馬大学中放，核医学）小此木孝佳，伊吹令人（群馬大学産婦人科）井上登美夫，佐々木康人（群馬大学核医学）

核医学In vitro検査の測定値の解釈，採血時間の選択に当り，健常人の日内変動、経日的変化による，生理的変動誤差を調べることが重要である。今回我々は，健常成人10名（男6名，女4名)について，PRL, FSH, LHの日内及び経日的変動を検討した。一昼夜1時間毎、又は女性性周期に合わせて，1～2日毎に静脈血を採取し，ラジオアッセイにより，PRL, FSH, LHを測定した。PRLは，日内変動に明らかな性差が認められた。女性では，深夜より早朝にかけ，昼間の2倍近く上昇するのに対し，男性は顕著な変動は認められなかった。FSH, LHは，男女共，日内変動が認められなかった。経日的変動では，PRL, FSH, LHとも排卵期に一致したピークを認めた。

126　インタクトPTH短時間アッセイの試み

高坂唯子、滋野長平、北村暢康、塩見一樹、李啓充、曽根照喜、青木純、菊池晴揮、小西淳二（京大放核科）、岩元則幸（京都第一日赤病院泌尿器科）、山本逸雄（京都市立病院内科）、大田秀一（京大整形外科）

血中ヒトPTH-(1-84)濃度（インタクトPTH）の迅速測定法を検討し、術中アッセイとしての利用を試みた。インタクトPTH用radioimmunometric assay kit（日本メジフィジックス）を使用した。通常の反応条件(反応時間：22時間、反応温度：RT、静置)を(15 分、37°C、振盪)に変更することにより、以下のアッセイ特性を得た。再現性：アッセイ内CV. < 12%(DOSE RANGE,16-1650 pg/mL)、アッセイ間CV. < 9.3%；最小検出感度、32 pg/mL；通常法との相関：r=0.992, n=46(dose range,16-600 pg/mL)；overall turnaround time:60 min. 副甲状腺腺腫症例（2例）において臨床応用を試み，良好な結果を得た。

127　健常人での血中インタクトPTH濃度の日内変動

北村暢康、滋野長平、塩見一樹、李啓充、曽根照喜、勝島慎二、多田村栄二、高坂唯子、青木純、小西淳二（京大放核科）、大田秀一（京大整形外科）、山本逸雄（京都市立病院内科）土光茂治（京都市立病院放射線科）

近年開発された2-site immunoradiometric assay(IRMA)によるインタクトPTH測定法を用いて、正常者での血中インタクトPTH濃度の生理的経時変動を統計学的に検討した。健常男子5名（平均32.8才）を対象とし4分毎に24時間(8000-8000 h)にわたり末梢血採血した。インタクトPTHはIRMA(日本メジフィジックス)によりduplicateで測定した。血清インタクトPTH濃度の時系列を、Cosinor分析、スペクトル分析、auto-correlation分析及びCluster分析(Veldhuis & Johnson)にて解析した。全例で、血清インタクトPTH値に、夜間に高値を示す日内リズムとパルス状変動(23.0±4.4(SD) pulses/24 h, n=5)が認められた。

128　RIAキットの経日的安定性の検討－第6報－

宇佐美政栄（岡山済生会総合病院メディカルリサーチセンター）

検体の集まりの少ない測定項目でも迅速なデータの提出と、経済性を満足させるべくSPAC LH，LH・ﾘｱﾋﾞｰｽﾞ，SPAC FSH，FSH・ﾘｱﾋﾞｰｽﾞ，VB_{12}・葉酸同時ｱｯｾｲｷｯﾄ，AMGﾘｱ ｼｵﾉｷﾞの6キットについてキットの分割使用を試みた。検討に必要なキットを同時に調製し、標準曲線、インターセプト値、3濃度の検体の測定値、キット調製日と最終回測定の相関を指標として1週間に1回、8週間にわたり測定した。現在までに得られた調製後のキットの変動のパターンは1)各指標とも経日的に低値となるキット、2)一旦は低値をとるがある期間経過後高値に転ずるキット、3)経日的に高値となるキットの3つのタイプがある。しかし、その変動の幅は小さく、殆どのキットで4～6回の分割使用が可能であった。

Presented by Medical*Online